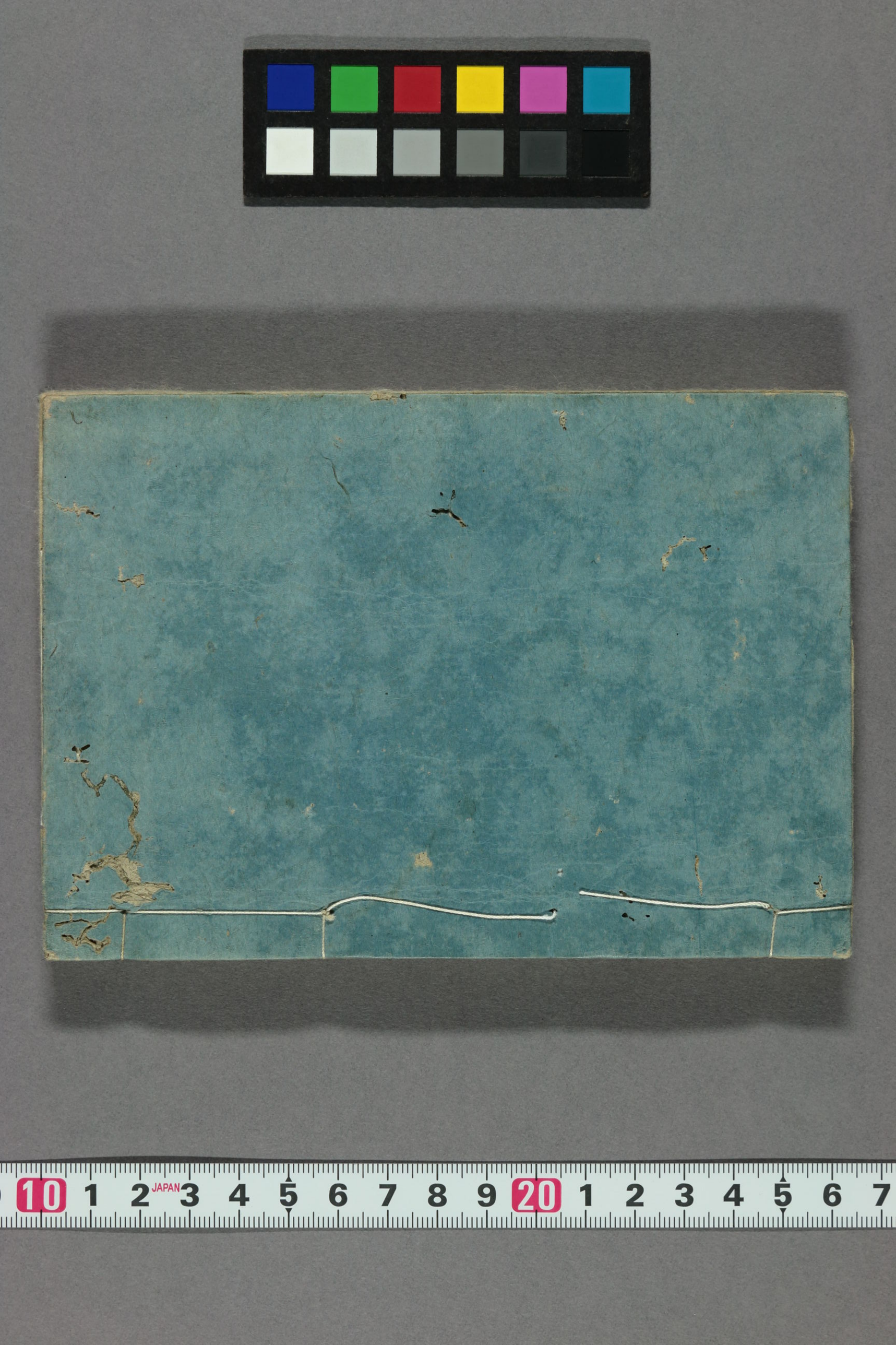


自序

むかしく[illegible]者。祖父大山しばらくよりの。路八川[illegible]ぶかきの姫のごとく[illegible]と林の[illegible]
[illegible]遠[illegible]ぐ[illegible]ひしゆ
茶の[illegible]人目をすりまんさんこと
[illegible]椒[illegible]。[illegible]ま命と[illegible]と[illegible]医
[illegible]と[illegible]と[illegible]折柴清英[illegible]史[illegible]

未世より乗ぬ乃中ち味連らきと
雲今と八多付る拙祖父山ゟ三度
おゝが姫ぐ姫ぐ少くと三さくと近世
を仕事使ぐ姫ぐ世をあ事ゝゝ乃姫
年ぐゝとぐぐゝと小ぐぐぐぐ
すの姫りゝ

成乃九月

風来山人誌

乃評

赤も亦徒然なる徒よ。日ゝ硯ふ
むらひて乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
そこたうとなく出ぬくと八謊の皮
打角ちひ智恵の底を叩て工夫
仕出と金高ら草も度の雨天ゟ
乃つゝ障あし

事なりの別莊は凡雅でもなく洒落
でもなく流人の泥住居吟じ貧樂
のこなし性。主人は歌よりも俳諧
二百石三百石取る員てやしの時でも
出来ぬ思ひ苦なるもなく二朱ら
を出て山面なりや四畳皆変房なりと
悟り小家見も構ふまじ人で

きまりの関こゑる雎鳩ハ三股の物
すごく窈窕たる妓女ハ中洲も好
逑ありと。口まくみる形も表の
方は人声して飛ぶるなく。市川は
堂十四郎事の大評判。又波路家
後面でござる。鄙るも程なく
聞てゐるめ。ひぐるまと

近ての賣声ハ例のたゝひもなすさま
なんとほゞやきたてる処に或人
まゐりて曰。世者一枚あゞ買ハ。市川
團十郎。或座敷ひ迄ハ給ひ迄ハ
出ずに既す市川の苗字を削られ
芸者も撞るくきに社者なりて性
べきハなるなんとは是ついその咄を

聊て。予笑て問て曰市川團十郎とハ
何人なるや彼人物を立て曰。是ハ
ゑ役者。役者も役者なるあなり
元祖團十郎一天下よ名を揚てより
初の相遊後の海老蔵今の團十郎
まで。都合表遠近三歳の小四人
現ずるハ團十郎と云ふ。山道姑

名ものなるべし。されど度の不指南。数代の
名家すら所を附市川の苗字を称し
世上の口の端も掛る事。言語道断也
るべし。相彼後家とくるべし。尤の笑人
のゆへもなくいらぬ恥のはるとりく
江戸中のお笑ひ草。まことに是ぞ知てのゆへ
ヲアヌ笑て曰。相しらぬ者は是ぞ

潰煮(ふみこうり)。
お初語。初ハ本ヲ是ぞ知ぬ事ゝ思ひ
ゝ。能ゝ世ヲ見ぬハ是ぞ知ぬなり。
文役者の身のゝハ。尖端(きせん)上下の裏(ひい)
屋敷清。諸人尊敬を第一とするも
るけく立役ハ。如何ぞ屋敷
らるゝハ。桟敷(さじき)の入り多ひ迚(とて)。孫今も

上ゝ。或ハ女の指櫛并。手拭浴衣帽
等入。眞面目なる者を以ハ
不働なるなれども。はさせる枕や
厚ふとんなどゝ坊ゝ。おすて。仕者の
方ゝ科ハなし。又眞勤の女中ゝ。
使を求ゝ。廣場故ゝ。
役者ゝ出ゝ公の発句をさて其中。

をとゝ。ぶる。祖師の法華宗なれ
色紙ゝも猶小ゝと也。更ゝ手差
万別蓼ゝ出も好ゝ。色ゝ自負
く。或ハ西の下機屋通なゝ乃
推個。更ゝ熟ゝ小ゝ。稼ゝ換ゝ
の夏をゝ。中ゝも後家の好ゝ。
借ゝ人の仕合貸ゝ人の歓び。さし小奴

土を掘て。蒟蒻を拵ハ。其ハ
能仕て。四五すて。ぐしぶすも。こうりお生
の。松茸賣ハ。ハ。そちゃん。こちゃ。ハ。
も。素人なし。能野鴨の類。ぶて。ぶこの
目。も。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
家。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
彼。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。

後。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
乃。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。

さて女でも年ハ入てもさすがに只ハ
居ぬ者なれバ。當ほうかぶりをして
せしめ、でも亦同じ事ぞ。扨又笠屋より
ハ悪。天ぜん人をまぶらかす。當方でも
悪女でも飾りに成すため。もあく
文ハ意よりかさ屋ハ。人々のあめ
ぢ傘のひくいう賤とええ毛深ひら

天鵝絨(びろうど)の。よりまさるふ覚へるハ。ふ
ぶ様(ようハ)ぬ年ハ不笠屋(きりや)ふ安とそこるす
ふとまぶらかす。ぶ人と安房ふ和
者ハ。温度(ぬくと)ふ者ハ。ぶ方(ほう)ふ一
切(レ)冷ふ気ぶ。ふけ。ぶ人の安房ふ粘(かれ)
ふの校ぶ。ふらふぶ悪ふらふぶ。ふ
ふ人ふ。ぶ者ふ。ぶさぶ。ぶん

ぺこぺこぺこぺこおせのかぐきこ。極く
あわせまいりまと。あるさるなくと江戸中
のはやすが。大そうなる。流行なれど。
君子の過ハ月日の蝕のごと。過ぬ
人皆と言ものそし。そして。世間の
名家おのおのも。行ぶるなと。
いたらぬ。ぺこぺこ。世の名代の名物。

南蛮十字ゆるして。様を為さぬ江戸
中の。貴賤ながきあへと。西ハ卯て未
四ツ。日ものとい。ハ。彼人大ま後をを。
後ろと契りて。新取沙汰ま夜事
と。無駄ま。狂をなすもとい人ハ。
こを対ます後。雷き。下ものあへと。
いのかの狂言。前詞を和ぶげく

教て曰。小言ひとつとして捨べからず。小悪
なりとてなすべからず。是ハ一通り
書ばかりにてハなし。寐ても起ても飯と
汁と香の物斗喰て居れバ。病気も
出て勘定ずくよりハ。却て高ひもの
につく也。おごり人欲にて。百病ハ
口より入。諸事の災彼ふよりおこる

是も親父の咄てきけバ。女房斗かぢつ
てなれバ。徽倉も財も入ぬ。結
構なるやうなれども家も人もそだつ
ぬ。譜を引ハ見ものなれども同じ
様な譜を一ツでもまねることをせぬ
やうにして処がなりぬ。必ズ見さま
ありまぬ。門人仁の集が古人と一致る

僊別に送る一書ありて。此出し
てみせける

門人何某いはく

予若年の時漢書を讀む。祖関
中に入て秦の苛法を去。法三章を
立つ。これも自法三章に約して血気
の禁によく盗賊悪夫なり。此三の

要きて今ハ小児もよくしる事なり。
我よくそおそるゝ事ぞ。常に之を
禁むへし

大石内蔵介ハ撞里に在て。面白き
る世の風流の士とさへ称らるゝ事也。
只ゝ欲を討事とも忘ざること。主君の仇
のゝ敵とも思ひぞられ。人ゝ志を処し家業

就る術皆欲を捨てう。討ぎんへうと
うたと沙位世臥とし思へ。あ
ちのあとこちらに桶鍾ぐまきた。
面白きるよなば小すまで四子歌と討
とまうぐ。よくまとへ
奥ぐ。ぐく酒を呑せ。酒ぐく
奥と呑るなし。

友人仁の果大ふ。げと矣てまて
まるぐ。或人傷ぐ生く
問て曰。汝ら首ぐや。友人曰。ニアラ曰。
首の八仁の憂ぐのんと。大変
て去。小と待て論実ぐこと
い人ぐ。予答て曰。大丈夫ぐ
時ぐ臨て狐疑猶豫ぐ。

本国(もとくに)を悪みぶつしきと云て首
の長ざる事なまぐ辛(さいなま)ずくまぬる
八道(はちどう)の人(ひと)を以て同八首乃(のゝ)ゲ
つく事なるべし。孟子の出す入く
大禁(たいきん)と同も首の身ひとつ入(いる)ゝ通(かよ)
ふ事ゝ禁の一助(たすけ)
公八方(はちほう)の言(こと)る教(おしへ)八下(したの)ねたいろ物

扁柏(ひのき)の上材木てき。おもゝ絶(たえ)八掛(かけ)
ぎ八。先(まず)斧(おの)て蒐削(けづり)盗(ぬす)ん実(まこと)
丈の朽(くち)き入ざ八ぱ八ても絶(たえ)ぬ
ゝり。彼(かの)ぶ人(ひと)部葉(ぶよう)の教も討
おゝ。古籍(こせき)を集(あつめ)て徘徊(はいかい)を楽(たのしむ)
ゝ事ゝあ事ゝ。本(もと)の法もなく。末(すえ)ゝ為(なす)ゝて
の教(おしへ)又(また)。ぶ世年八方(はうし)ぶ雲(くも)

ままよ鉄炮汁。当ると死ぬるとままよ
らん。いかゞふぐとふぐを食ての命
湯の中で拝を振る鉢。鍾の当座も
なけれバ。天竺を持出ても彼岸の
気きなす。隠れも無一度。天道とふ
目のまがふ所上りて見てござれバ。今は
ある人。ある人いつ人見て通りが見ても

知らんから。ふぐも食て死なバ、ぶとふとふの
いふ尾がきて。人の女房をつと握て。封
ハ。モウ云ふ切で。無き打とさいると見えハ。ミなハ
くわへて止て。唐十四。いかに気ふ丈ても、えへ
気でも出る迄。ハちんころがらん。ご路
ご縁の無を。ござりて死ねバ、旅抹
そばの邪群墓での。ゆとも男らしく候

ところに気尺の雲にて。浮世中みな堪忍なれ
益々人嫌の路にお门も外のみ鳧留所。
悪くぬるとくんげみどうでもお
よまぬつらもねむげよまあれ七の年。
秋ぐれる葉月上旬。風来山人浅草田町
の別荘に。籠りきりして是を記ス

序

我風来先生。戯に筆を
採り。多く此小説世に行れて
より。近世開板の俗文多を
かゝり文意を慕ひ。或ハ直に

風来山人と祀奉る。是
皆書林智恵もなく人銭を
欲ガル。漫ル　先生の名を
かるる。言語道断不届
千万なる。まぶしこそ評判

茶四畳は。孫懐先生の
作なり。筆勢頗る似られ
る。作れる花の匂ひなきが
と。其餘紫の朱を素い。
蓁の苗とみぐる面白ばい。

炭園と名づけ玉と歎き夜
寄と盛三と備るもの女
かゝば今よう後皆く制へ
可ゝんと先生笑て曰
亦仮と答ふて人の聲色を

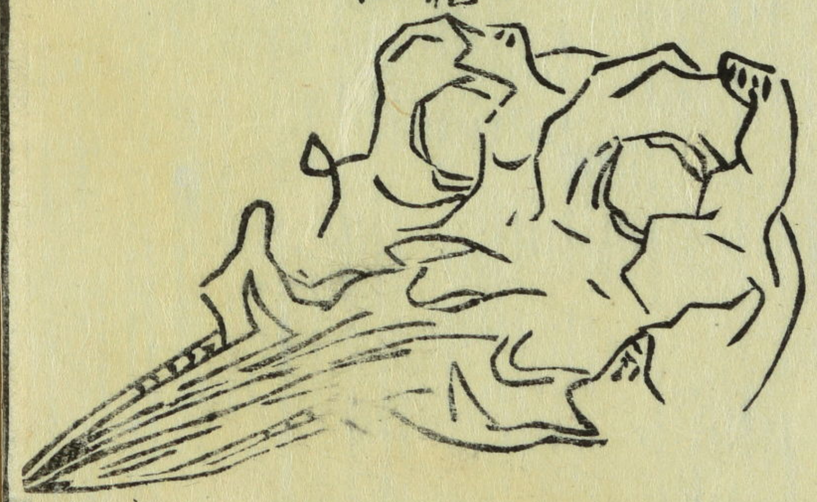
世ゝの物好み能
万人月明三人責るも却の
後世ゝ強て咎るを及
ばゝ其終を行ぬ
頃日書肆清風堂大塙

氏の方より天狗蠟燭鑒定縁起を得て摘末す
鏤も是で正真西鶴の
風来先生の作なり善と
悪ひハおのゝ〻ゑらて清覧
ゝ

戲蝶謹誌

天狗髑髏圖

頭大サ六寸余
鼻七寸余
目の〳〵成穴一寸五分程
耳の穴二寸 牙五分程
咽の〳〵の穴二ツ
都て一尺二寸余



序

不時ハ出来、或ハ天狗風と
ゝ。當今〳〵ハ或天狗
と唱。又ハ狗賊坊子。天
狗祇諸等。これなのてゞ

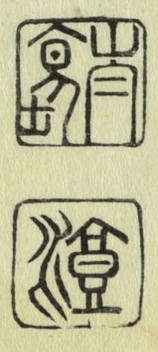
猶いよ〳〵手しの事。手ゞ
拾陽する貴肖を。天狗
の稲荷といひ起元し
元此事ひきゝ世元。志の
新玉風雲先生夢を

探事より苦く世上ハ
頂れ外く。見もるを
祢ゞ子人多し。系も亦
古程式刀勢て。鈍を
正ゞ交工元外く。只持

あり知て隙(ひま)なけれども
で。法(えろ)無き紙見をもの。
人は目をくらまさんよりも
あらばこそ
をとらり
山乃上物でもなし

と口すさみ人一度の
笑(ひゝぐさ)種とし考る。今
書林(しょりん)はもとより
愈しても買しあるを
へぬ。

大塲豐水誌



天狗髑髏鑒定縁起

明和七ッのとし一茶月末乃四日。門人
まりて薬物の鑒偽を試ゞ。折柄
一茶を叩くこゝの八大塲豐水あり。
一乃異物を携へまりて曰。昨夜ゟ
狗武義也。今朝夢さめて思ふに。
ゟ廿四日まで所ゟ宮乃孫日外まぐれて

芝の新宮を造るに。門前桜川と号
する小流の中に腥(あや)き物あり。拾上
て泥土(でへど)乃穢(けがれ)を洗ふに。忽ちくの物
ひらとして邑城(くにしろ)に飛て西に向ふ。此不
思議なる帰るさの道にて。アるゝ者の皆天
狗の髑髏(ちくろ)なりとて市に売(あきなは)せど。固(そもそも)俗
人乃信見(あてずのあやまり)。疑とするに是(これ)帝八先生

先(まづ)偽を免ぜよと。予諾(たく)して門人ゝ
告て。各其志なかいなむ。一人ゝ曰。これ
大魚の頭(かしら)ならん。何菌陀のかゝる。また
ゆゝしきならんと。又一人曰。蠻夷(ばんい)は大魚を
アゝ。那(なぞ)まて大きゝ事あらんや。これ大魚
乃頭骨(かしらのほね)ならんと。反覆(ふくふく)上下の論。異説ま
ちゝくなりて。是儀(しぎ)一変せず。予曰。これ天

狗のちゑれうぐ[illegible]。門人答て曰。吏レ
倭俗乃天狗と称するものハ全く驕
魅魍魎を指ていふなり。定れる形ち
[illegible]ものなり。扨又今世ニ天狗ゝ画
くに。鼻高ハ。心乃高慢ゝ[illegible]
ゝを標して大天狗の容ゝ又觜
ハ出ハ。駄口を利て差出ゝる木

の葉天狗溝飛ゝ狗乃形状多ゝ如
ありて草鞋ゝ[illegible]ハ飛ゝ[illegible]
形もゝる自由ゝかゝる。扨乃樹ゝ住
居ゝれども店ゝ出ゝゝ[illegible]
ゝ羽扇ハゝの入をいとゝ怪異ゝ
[illegible]。これ皆画工乃思ひ付ゝ。実
ゝ乃ゝ[illegible]物ゝ[illegible]。聖人も

怪力乱神を語らずとは孔子の玉へり。況
是は天狗は弱虫なれども我こそは欺
る者。予曰。諸子疑ふの理れきかい
ら決去をのう。亦微意を懸ずんハいざ
ちバ語り聞さん。古人乃曰。薬を賣
ものハ両眼。茶を用る者ハ一眼。茶を
服する者ハ無眼とハとと昔は謂今

時の醫者といふハ武士の子なれハ惰弱
者。百姓ハ生ハ疎懶者。町人なれハ高慢
なり。職人ハ生ハ無用者。糊口
を為ものの醫者ものといふ。
これを号て。でも醫者とて。
其長羽織。そんと庵もの中。茶
乃事ハ陳皮も志ぐ。長袖も長路も

蹴えまぐるもそこらだらけが醫者
ぐらけ。菜種をも盲醫者をめくら。
病家ハ狂盲なり。臭橘を枳殼と
鼠麹草を茯苓花と。鯨乃牙をう
ホかうるし。氣蟄を蟄虫と。翻
白菜を柴胡と心得。廣東人參を
人參と思ふ。其外千變萬化乃大

間違さんとも浮世ハ盲子人さく
らんの茅ハさくらん病ゞ買習ふれ
ハ是を賣るの家蔵を建。これを用
るるの四枚肩よ多。さまを呑者往
生乃素懐をとげれ。うゝ眼をせね
ハ気の毒ぶとも要ゝ。嗚呼邪ゝ
う形文盲ゝるれ。予これを憂て藥

物は真偽を糺し世上乃醫者の目
我明んとて千辛万苦せんばゝ
ゞ心ゝ引出て山ゞは取沙汰。智者
ハ水我楽。仁者ハ山を楽。后稷ハ農我
教え禹王ハ治む。過るをさ
過き。足ざる我補ハ聖人乃ハさを
知り。山の毒なる山は芋。鰻鱔とゝ

らで枝果物は。暑預とも丼諸とも
旨ひ奴等ゞ口は端よりかゝる浮世ゑ
産れ来て。牛乃糞も胡麻味噌や
ら。屋みゝうちは流波塩参は風
も所も。蟹の堅も稜道やうぶ
ゞカゴうへとちゝうあゞこゞ我なるものハ
利口ゑ人ゑ出る杭ハ打て多ひ。天狗

乃ちさ毎に其偽を論じ。時に移せ
バ脱ぐ為う。日ぐ重れハ店貸ぐふへ。月
ぐ延れは質ち流ふ。儒者ハ本田にて五
に通ふ者ぢとくて。堯舜の民ふ
志めんと。賢女両夫ふ見えと。女
戸屋に二階ふく遂澤ぢさるハ蠟蟠
ぐ惜松ぢとくて。我ふ似よふ
ぐ也。

動と止ふの文字ハ今ふても。馬めぐ
合点いふきねバ。世話ふぐ当ふけ
れぐふ。脱へをいる菓ハ人命乃
存ふあづうれバ。ぬぎても赤目
引ふう。某時珍ふふかふ。一問
答せみぐふねど呑ふぢ傳云
せぐ目を読ぐふて。毒ふ

えゝ物ゝ茶ゝ茶ゝ。何れも茶ゝ茶ゝ
ゝゝざれば。諸人自身にして天狗
とゝゝく嫌しがるゝゝば。其波瀾揚
その酬をまつて。天狗みすぐる
卓見なり。ものゝく後目乃蚤虱さへ
悉ハんをさんれば。おゝて天地の廣
大なる萬物は塵埃なれ。一人の目玉

ゝゝく極めゝれハ。若ハ絵ゝ画天
狗殿ゝおゝ出世廣いものゝなれば。
有ゝゝゝ天狗ゝゝゝさゝゝまる
男ゝゝなれハ。微塵ゝゝくゝゝん
ゝゝゝく。ゝゝゝゝゝゝ小を繊の切ゝ法
丑不自由ゝし思ゝねば。只畫花と
ゝゝる細工人乃おんなゝ法華ゝ。若

又天狗ゝ何和尚と根問する人乃
ゝ[illegible]ばたまゝ高慢ゝ過て科あき
者を悪くいふ。人ゝ会ゝ抓
ぶりゝ加ゝ[illegible]ゝ。天狗ハ動玉太良
坊度怒をれ。木乃葉て狗ゝ
とゝく首ゝ切ゝく捨ゝる。豊水
ゝ見ゝて拾ひ上ゝ物ゝ[illegible]

皆余所の事ゝ。今時世上ゝ
目ゝ付ゝ[illegible]ば。おゝ[illegible]ゝ
せバ者ゝと思ゝ[illegible]ゝ
系ゝ書ゝ馬鹿ゝ[illegible]。謙退
辞議ハ間ゝ会ゝ。高慢ゝ[illegible]ハ損
ゝ[illegible]。又ゝ高慢ゝ[illegible]ハ。天道
カゝ[illegible]ゝ。必憂目ゝ

その形ち。人く情少くうつしとは。皆
尤とうれつ記ぬ

天狗さく野夫でハふいと毒しうく
極く中るか通りこのれり

風来山人書

跋

天狗髑髏鑒定縁起といふ。
一ときせ子ゝ戦ゝ記ゝ。大場豊水ふ
興へくるを。此頃書林開板ーいるを。
武人昇ゝく子ふ謂こゝ日嗚呼子ゝ戦
慨ゝ碁ーひふ。彼文中鑒者と
藥店共ゝ言ゝし。陳皮と志ゝ

仙のうそ。陳皮ハ蜜柑の皮なり。
三歳乃小兒を能是を知るまゝて
陽者ゝ本草屋を。此書行きさる以前。
此文を削去て世の嘲を免るゝ。
平言て曰。陳皮のゆ神農本草經
ハ橘柚と。後世二物自分なり。
或ハ方書ハ橘皮と記し。陳皮

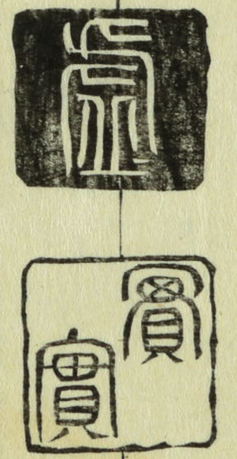
青皮のわるもの。殘るを青川
氏ゝ本撰ゝ議言をいくゝ。
古方家と稱ゝる文盲者ゝ。
陳皮ハ捨ゝ青皮ゝをつゝ。
陰陽造化の理ハ暗く。菜ゝ
〳〵療治ゝ。坐行ゝ轎夫と
成り。達磨ゝ童を勤ゝ

似たり。蜜柑の皮より腹の皮に以
笑止千万と思ふ息ぐ鼻へ
ぬけ。誠まことに出ちせく
なり。こけおどしの大こうり
あるまで習ひしくバ義て御ふ
屋。是は悪たいと無念に
思ひ。茶屋よりもせるに沿高よも

せるの。壺ひ茶ちさく壺で。陳
皮一味のようりもとうふと
いふ人なるパ来りく赤と議
論せよ。所ハ神田大和町の代地。
一月三分の賃店で貧乏
者せるも名も隠まを形。
時年安永五ッのかりの尻

跋

笑ひ赤いちよ申ハ梅月借金乞ふ
いひ訣の暇風来山人識



里乃をぢ丸評自序

莊子ゲ寓言ゲ式部ゲ筆ぢさ
み。司馬相如ゲ子虛烏有ゲ弘法
大師の兎角亀毛ゲ去りとて八
久しゝ物ゲ有り。予ゲ亦彼虛言ゲ

なるひ、象徴ちゝれぬ麻布先生、
古遊花景乃人物を設く詑
八百を書ちゝ、計を拵て
いひ、火を以て小とする八多が
持まへの滑稽ふりく、文の餘情の

譫言あり、或八不埒地名あんどハ、
人の耳馴てる便りて直ち其名を
ゆゝ乙田作り物語なれバ、寓ふ
此ゝ物語ハ、怪べし。
安本元年手孤乃ちつ秋。

有頂天皇九代後亂。風来散人
居續の風呂揚宿酒乃夢中よ
筆を揉れ。

吉原細見 里のをだ巻評

賢を賢として色に易よと。唐の親父がむだ
をいひ。外面似菩薩内心如夜叉と。天竺のきつ
との皮が色ひ入ずもりいでもな。面白といふす
も呑込でおかれまいも。気短りいふてハいらけぬと
霧雲に臨。雅りそ阿しぶきれ山のまゝ一の
艸庵と撰へ自麻布先生と号する人あり。
されバ縁しき諺ゞ。牛八牛連る馬ハ馬連同気
相求同類相集の習にて。古遊散人と呼る
志れもの。戯墨れ見辨ようへし於に。麻
布先生乃門人花笑とよべる当世男ま
捌りて。四方山乃その係。三人寄まへ文殊の
智恵ハごとく宀らそそろくと理に入て例乃
拾ひの艶膽出し。龍景志乃川磨りしく

懐中より小冊を出し。先生是も出来有ま
ど。あ是こそ吉原細見乃一枚摺墨の清環
といふものなり。扨亦一書とりつ。古橋中
丁楼下れ屠竹化して蛍と成り今五丁
町を光を争ひ。全盛いとん方れし。系
の倡妓江戸れたりとそれハ昔乃喩
茅。今ぞ吉原深川をとみまぜ。あのまま

栴檀。拉乃きりたの賣婦氏上の有べき
やとき一人吾四でやきみ正く味噌
とよれバ古拉散人熟吟す。彼とぐ
き乃一枚摺。臭ハ不も臭ひ不を一面
涙をぐりくとそ。山のまかく吉原
まくく庵をそ。ある吐息をひて中
ゲるハ。呼笑止なるを形るその多我

日本小国なりとゝ雖も五穀豊饒ゝ饒ゝ金銀
多く産乃物に事を欠ず。繁花の地柔
弱。柔弱傾奢大坂を新町長崎ゝ花山
とゝ。信国乃産品かぞへ尽しがたく
各古記の風流ゝゝ行きても面白くゝぎ
る事。有が中にも江戸の吉原一と
いゝ二のゝきゝゝ人々も多くゝゝろ
ばそ更ゝらふがゝでゝ。世上にて目ゝ三番屋
此里の女と競てゝ異ひの外に元おくゝ近
ゝ強接ハ山下にゝゝ茶屋ゝ遊
ハ一区の大評判。然くゝ遊ハ吉原にて行
いる女郎多りしが。吉原ゝ居ゝ内ハ廓乃
十把一からげ方ゝ目ゝゝゝゝなし。
廓外へ押出せば掃溜の鶴の中ゝ金

花さ茶金乃派出しめとハ評判と及し
なり。彼吉原ハ女郎の傍て宮ゝ人面る
ものハ。幼かゝりの育かゝ。三尺振袖髪
容貌一氣を大切ゝ。殊の時ゝ婦
女良ハ仕ゑ方あるとゝなり。船中ゝ古。
女郎格子ハ上品ありてハ琴三絃ゝ
いのゝ及ぐす。侍の奇麗清茶の湯。碁

双六様方。何れの芸ゝを習かゝ。俗藝
を知ゝ知ゝ都ゝ。見識有ゝ度ゝ分も
上方ハ女良などの生れてもるゝ故が吉
原なり。今乃さんちゃ分ハ以茶乃
女郎格子に劣らず。きゝ氣地ゝ風雅
なり。音ハ〳〵なゝハ藝術あり。また昔の
風義強り古川上水孫ゝ。假令善蔵の

景向あり天人が天降てこと負ぬが比地乃
女房なり。是場所の賣女ども。奴とうりく
まりこぶやそりかへ玉同為に一月一度
八百ゝで領於ゝてこ垂れさんとる松と
う名とかへく。興奇傳婢にく使へ所
いろそ誤炮庖へでこを匠下し。免許の拍
所と岡場所ハ雲泥万里の遠ある勢と

ゞんせてこそ吉原ともいひべきれ。いろは来
世ゝ成ゝバとて。是場所の土娼たる大生ある
名を分く。二人兎角安持。安物もおつけ
ぬ乃中。を癖我ある古よ者を好。あひるの
是ごりゝん絵傀ゝり中の所れ人之に氣
を光しく脇指バ紙乃いざこざ面倒な
事。又下地かゝ吉原に居る女房をふい

なし。親方ハ金さくとれば。逃亡をそそ〳〵出くて
も商さうせ友ふのりとゝ。イヱ〻ろち第八屋
場所の土妓流と奇樂よハ。ゑ成いせんと
ちくさをバ。ぶ お法ゑ ぶやゝる笑うケ言
原中に智恵ちなく。女色ふ氣がなき有。
助乃ごとくう成りて。別自腕そふ
ふ細見をを拾ゝく世上へ恥をさゝ〳〵ゝり

屋場所のでのまでをさ引分といふ氣を
やめゝく高ゞ本いでゝと言原ゝやと古
流の角を省さぬやうにぶつと守て居る
時ハ。奥原發ゝ中子有自般昌をるく。
移り安きハ人ふ上方にくも一ゝ。ハ。独園
町浩の内小乃彩地ゞ盤昌ゝ。彩町浩原
ふ不京氣ゝりしゞ。をゝハ又そろくと解

八幡宮へ復る為ひ分にて始りるハ
一義斗てさあ寄ー。当年の縁などと
初ハまかるくてあちこちかりし。落ち始くお
りくきて。役者は有れ声色門をぞり。行年よ
似くく氣ぜ毒なりとん有人〳〵乃任利
も有ーでし。病よ廣ぬまや素パいや
ゐを按摩楽をまハーいろくにちやべく

ハ
ぬ売ぬかりりがけ。ん病る慶茶ハ
だまりて居てと笑よ寄るなり。料理で義
を云ふ〳〵。の見ひ分パまや
茶を売同為くく女郎の恥とん乃慶
又義者都間を。居場下りまざしぬ
中てと五郎のの名ゐ才一ゐ。かくくだ
ゐくく必ーを大る面ハせぬぐは米ぐ安

あてゝ江戸にて江戸にて。
地合が悪敷。深板ゞ氣に入らぬ。横板ゞ當
世むきと。代物に氣ハ付ず。あぢゝ
下り書を形。今乃板に候と思ひ付ゞ
かゝじとさゝ。中の町に男倡茶屋。大門に
て歌舞ゝ引とあ。大ぶに紙とゝなるざ。
紙屋頭ゞ出ゝかゝを志まぶで。そゝく

とゝ笑ハ器物不ゞ吉原に吉原ゞ器物不
ゞ亦ゞ亦ゞ女郎と賣女
のたゝ賣。行でも擬原十九文。扨若く衆
ゝ考ゝと眉を寄ゝ中ゝ。手ゝ
糸銀煙管を衆車。灰吹をゝゝと
歌あざ笑ゝ日。古格子の縞ゝさゝり似
て長低。されバ古ゝ奇ゝと極ゝ人ゝ。

忘乃育ぬ里を別し。かゝてそ身八陰
れ。同一天地の間に生る人間を
見け那と見け。村を見け里を見けて。
恋を諦ずるハ僻事なり。いゝにも者ゝハ
日本第一の拾ゝ。女の為傍を見ると
いゝども。百人ゞ百人千人ゞ子人なゞ
能と宜ゝるゝも有ゝべ。細見嗚呼お

江戸北斗を看ゝく。或ハ骨太毛むく
毛を。猪ゝ獅ゝ熊ゝ鼻柏尻の類なきにも
有ゝべ。青系の女郎なれバとて代ゝを
奉筋者ゝく女郎ゞ女郎と差にも有ゝべ
後乃中ゝゝ能ゝく拵さ甚多とあゝべ
又間坊の女郎ゝ有り細工乃出来
合ゝもあゝべ。つまゝ和ハ親兄弟業

業花で蔓もせばくなる事は此の如く是
吉原へ行き墨堤へ行も皆まくれ岡源
づゝ。能も有悪いを知り。江戸前うゝ
ぎと蒸うなぎ粗肴味も遠ざ。乃酒
と地酒ゆど水の遠をたらぐれば。吉
原にも孫瓜なる。墨堤不可思人
あり。又幼少かゝれ育テかゝ。ゝゝ

ゝまい鬢容貌一氣ごゝを大切と氏羽
又非あり。習性と成ゝへバ。鈴木乃梅。
うけゝの松。仕ゝまもゝるべれど竟の子
冊朱不肖あり。業の子を亦不肖ゝり
三年蔭ゝも妄悉ゝを思く。十年
養ゝゝ石ハ硬し。又蔕文風落ゝ
生れなかゝゝ能ゝの行。八丈時ぐく

八幡宮と織王宮かゝ菊之亟ゞ出るしれだ。去
橋中十八枚亟。根津喜羽茅葺圓ゝを
揚炎妃西施ゞ有つも忘れず故又當世
り蹂躪涂川の風流ある事と思ふべ
ゝ一ゝ不思議なとのこゝ芝てゝ多八月狩い
なきる共者り。吉原乃地名如陰り
かゝり。一方ゝ不思議をゝ。ゝだ

てゝ色バ形多多ゝ涂川の地八陽氣ゝ
して偏らず。松乃通路自由ゝ。牡蠣
者の牡蠣文蛤所ゝ文蛤。鰻鱔八思ゝ
丁ゝ名ゝ。唐金燒ゝ万年丁ゝかく
也ゝ。竹ゝの銘味。料屋ゞ酒肴。二形
茶屋。二形ゝ限らずゝ栄ゝ。塩濱塩ゝ
燒ざれども張ゝ。角力あり。年長ゝ

山軍あり。岸家石切り本場の囲碁は
太公望も歩をとゝび。二十三間堂の大矢数
三十三間堂由基も弄を添す。彩地の名のごと
ゝく古。石場乃人自和ゝぎ。遠く客れ
入船町。接びの弦を垂助屋敷。表樓裏
樓。猪瀬やぐら。佃彩地。中にも古橋中丁
にて今盛れ君多く。川こは船筏を組。

陸に輸送乃屯をなす。送りむらいの提灯
ゝ字治の蛍は花かゞゝく。茶屋ゝ打
辺家衣を鳴門の潮乃音ゞし乃毎
の発ゝれやゝ。山海の美味刻
と印。蕎者乃徇子乃常小猪りさん
ぎれ小二奇天乃よ新れ。世上乃女衆
羽織着と。サッサヲセゝの浮拍子を

皆比里と略さんか又、女房れ新象といえば茶
屋とゝくる遊屋なり。或ハ京の三百のと
ゝけ隅々住内なく。彩色袖ちゐ唐衣の
雪信。茶司長持衣具法華。抱乃住宅
世茶屋紅者。幸改来社の名産。紙日の数
く箸のやうゝ。表い立面れ責もなく
同じ歌とゝひゝ。内住の苦しみ為

く。貞おちとんのびやうにく。新象と微塵も
いやみなし。今吉原へ押出すことあまり
珍くもなきぬるり。是でも是切と袖
しぼりと散と赤めるく傷じくきべ。麻
布先生莞爾と打咲て曰。此表の爭
ひ表為なりる。名一理なきもなく
ず。さるが〳〵半れ内の魅大海をまゝ美

の宮社と云へるの傍なり史古にも著しき
所。に神崎野上の里。大成假粧坂の新
宿名殘りにて今人なし。寛治年間これ代の
作惠。繁義の地に新鄙と云へる色里
多きその中なり。押出る 免許乃地
なり。擬者あり。かくしてその子。地者者
なんなりといへり。傾城湯女白

人踊子。比丘尼飯盛絵法みの。歌舞曲
時。舟饅頭の新。小哥まる出。
人と乃知ることなり近年提籠と
稱するおそびの手輕をいひ
じめ山猫と名付しに化て出るといふ
るるるん。又地獄と行ぐ名せ。ハを初
清元楽つとなるんいくるものぶるを企る

と云ふ根乃清水とゝ云ふ。仲哥
の者ども食物を此樹くとゝのひしよし。今
こゝを名とは成ぬし。その名も有り
なりとく歌ありまり。浪華にくへ越路とゝの
伊勢ゝ雪羽あのづまとゝ走りかゝとゝ
古市ゝとゝ云ふとゝ。伊豆ゝ下田ゝ
せんぐりあり松崎ゝくねんがあり。丹

後ゝ走らかゝ越ゝ水浮身あをのご
ゝり。出門の萩ゝ おかごまし。下関にゝ
拍ゝい私ゝゝ掛ゝ手をたゝくゝより号く。
肥後ゝきぶゝ長崎ゝ。ゝをもゝゝ小
女性ゝ。伝列上四りべざいあり。松ゝ
ゝ張弟あり。加賀ゝ化粧名護屋ゝゝ。
出羽奥ゝ根ゝ海とゝ。ゝ初の女ゝ蕨

餅を賣る店。名を花屋といふ。津軽にて
げんぷといひ。麦粉にてこしらへ。味噌やらくと呼。
松前にて茶饂飩といふ。尻ぐまといふ
るすりの。ぐさと跡しきと魚ひ
の差別はあれども。味を賣ハ一ツにて拵
えうりうりうりハ鮮をなく野菜も
ゐく。会中は有所の有中に会ゐ。ゐき

〻ゐしきが面白に沼ゐ。跡きと
磯ゐ面白かゐ海ゐ。それお魚
の楽ゐて。掘手魚ハ石高沐をめぐり錦ハ
大海をおゐぐ。牡丹を花ゐり野菊も
花なり来書。松まんぢうを楽む者ハ
鼻の高るをゐ。思切ゐ拵ゐ
人々思情ゐを宮上といはゐ。

も物さうと思ふ。花茶丈の味噌をとる。女の
羽織は世の風俗を知り辺先きうずめ
浮抽子は極る風情あるものをうしろ。是
岡場所の遊風俗なり。又肉饂乃若き落
く身形とんの記やうにく氣象う儀
麁をいやしとい鮑魚の鮮臭とを
覚へざる深川は抓んで深川乃宪をうしろ。

丈彼地乃女衆は鞠者をのりつき出あり
手きに乗りてくらん人乃女房を賣ける。
或い女郎の身ぐ彩子をかく系。系所を買
くめくりを打。掛金百歩一の下駄をて
いけをせぬ癖人を茶屋。お代おもく
呼食。一字をさ三でけて身うう。奇の唱
奇の耳こをり。辛をの身者りの語ん。

督。家乃家名古代兵法。大工
左志ガ〻而ヨ工夫セラ〻一二三玉
玉と名付。漆を塗りの器物而と。万
代不易ハ古原を〻べ物よい成ぐさ
〻。又古原の素三廻い而亟。初つき
〻その日乃古法。仕名せ衣裳乃
種類と。古風をおも易ざるゞ此法

の為さ仏ゐれども。未熟の人乃習
而ヨあ〻ず。又古拙ヨハ儀式を為
ヨなか〻。こを也と云とは い〻ざる
世話なり。今古原の如兵おし〻と
いへども三ヨ人さ〻ず。ハ為せり。器物而
ちり来ま云ハ名り〻いくども五十人
ハ遇ぞ孟子ヨ所謂楚人これ

と林せゞ多勢に会勢けひやさず。
囲場不乃悪風義をいつとなく
そろ〳〵吉原風う変をるなり。
ゆ〳〵をいろ〳〵屋うゝゞ。中ゝ堀を
蹄せゞ。海老細流を蹄せず。目乃
辯さぐゞく鏡の縁さぐゞく度大
会変の取四務負。六十條列の人心

独差別乃物好粋ゝ粋ゞ面白
カリ。鈍漢ゝ純漢祖蹄ーゲ。茅表
ゝ一乗不ゝ。百ゝ二度も切
せる。錆手況生涯度。鹿いゞ
吉原。つゝくぬゞ玄原。花ハ三芳野女
郎ゝ吉原。純不の楊ゝ芳野へ挿ゝ。
即吉野乃楊なり。囲切不法私娼

ぐも京へ来りたるべ。近ク吉原
乃倡妓なり美と恵ひれとまを云く
此後おもき

甲午の初冬　風来山人

跋

童謡ニ曰。五尺體ゲこ尺解ク。況乃
二尺ハちぎる孤ゑ謹で按ずるに解る
ゲ如くちぎ侍ゲでき之の海参ク
藁ゲり。人ゑ人あり。或ハ彩五尺
石部金吉ゑ。一度吉原乃風ゑ

南きバ。米糠あると山屋の豆腐
ばかり。我　風呂先生掌
いくらもあり。豆腐ハ軟らかを
ゆでたべ。極ハ和らかを厭たべ。
赤ハあまきでもよろこぶよ　膳
れを入ざれバ。練酒乃ごとく米

糊の如く。極乃苦きよ極あるれバ。
家業を怠惰を放よ終り。糸ハ極あ
きバ氏の長非自然。酒強失をよく
ざれバ酒を呑て酒を呑れ極和の長源
を糸ざれバ極不平ばて苦汲を言る
と。宜るうの法言。苦苦を一箇乃曲

天行のて。雖人の長短を志り。今此
をで書記乃評を著す。彼義士大星
由良義の敵祝ふべきも。人皆彫
る望なり。望なり不なり拙い来り。
木を外はし来を内よ出るとなく。
分乃ち浪を志りて祝こり拙

家バ一時純常花り千年を移る
とやいちん。

安永三年甲申秋七月

門人笠名子徳

同盛

風來先生著述書目

野夫論　近刻

虛實山師辨　仝